

# 白金葎

12月号



平成30年12月発行

第93号

定例会句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

一月十八日（金） 第五正午～三時…新年一般

二月十五日（金） 第五正午～三時…吹越、野焼

三月十五日（金） 第五午～三時…春の月、蛭

兼題参考句二月十五日分（新年一般）

新年のタクシー日章旗を交叉

山口誓子

初詣吾も神杉抱きかかへ

〃

ねこ舌のおくるまる箸や小豆粥

貞

これからは引算ばかり年迎ふ

清水基吉

宵越の北極星や年新た

三橋敏雄

十二月例会句会報（18／12／21 枯蘆、白鳥12名欠2）

光成高志

枯葦原何ぞ明るき分け入れば

白鳥の大群みんな進みゆく

田の白鳥立つ鳴く羽搏く水駆ける

年末宝籤売場列十重二十重

青き葉を捲れば竜の玉数多

佐藤宏之助

産土神の落葉は近所の人が掃く

ひとり来て枯芦原にうづくまる

大利根の枯蘆原に来て哭けり

白鳥の里親となり嫁がざる

葬り寒シヨパンの別れの曲流れ

増田陽一

書を閉ぢよ白鳥が湖埋めをり

枯芦や鷺鋭とき沼に風渡る

共に歳越さむと抱へシクラメン

机上茫茫冬越す蝶の蛹ある

蹠跟と学生街に落葉踏む

光 みち

北側へ傾ぐ芦原枯れ尽くし

落羽松の気根に触れて落葉散る

陸の白鳥家鴨と同じ歩きして

白鳥の命の首の自在なる

学校も墓も田の中白鳥来

松村幸一

はるか来て枯芦のこゑ聴くことも  
枯芦にとまれる鳥の揺れてをり

考える丈をのこして蘆枯れぬ

田宮敦子

雪女と逢ひしこと秘し寿

冬日差す通行禁止猫二匹

月の兔濃くなつて来るすすきかな

アコーデオン舞台で踊る外小春

嘴上ぐる白鳥の空白鳥座

白鳥の集まる田んぼ野菜売り

恋に身を熱くする白鳥もある

小春日や庭に二本のストレチア

浅野正美

枯芦や対岸走るトレーラー

諏訪神社家族でぐる茅の輪かな

武者昭七

七五三娘の着物孫が着る

翼折れし白鳥もあり雨しきる

助走つけ白鳥飛び立つ細波

枯芦は一声ガサと鳴りにけり

芦枯れて湖沼広がり水ひかる

日輪を負つて白鳥高く翔び

おでん鍋湯気のみこうに母の笑み

白鳥の唄聞かばやと畔に立つ

仲本興正

白鳥と呼ばれし夜行列車あり

白鳥の影となりたる水のうへ

磯目健二

サンサーンの白鳥浮きぬ朝日中

すがれ芦吹く風の道見ゆるかな

白鳥といふも命のあかきこゑ

枯蘆原沼底深く鯉籠もる

白鳥の沼へ大橋潜りけり

枯芦の岸辺に釣り座定めけり

群れ鳥のなかに毅然とスワンかな

中川素子

夕映や枯芦原に風止みて

水しぶきとばし白鳥朝の川

十二月ライブハウスの赤ワイン

主逝く庭に苔の冬至梅

今朝の冬マグにミルクと生姜糖

吉羽多美子

夫逝きてさみしきこみあげてくる師走かな

白鳥の一羽離れて夕ざるる

滝の音近づく紅葉色濃くし

冬来たる暖さのなかの庭仕事

枯れ芦にふれてボートをこぎゆけり

飯田孝三

白鳥の着水婆娑しや羅尻ぢり奢ちやる

さざんくわの梢二三花日の差せる

平成たたむ拍手お手締め三の酉

枯芦の穂絮呆けてわだかまる

コンクリの護岸白鳥スワンの羽拾ふ

一句鑑賞

光成高志

日輪を負つて白鳥高く翔び

昭七

雪富士を背景にした鶴と太陽の絵は正月用の掛け軸にふさわしいでしょうが、掲句は富士山を省き白鳥を日輪を負つて飛ばしているのです。しかも高く飛んでいる白鳥を描写しているのです、私はそれが日本武尊やまとけるのみこととの白鳥伝説の白鳥だと思いました。昔出張で鹿児島から隼人という駅で降り、ぶらぶら歩いていたら、皇子の能襲征伐の跡の公園に出くわした。思い出を一寸蛇足。ひとり来て枯芦原にうづくまる 宏之助

なぜうづくまったのでしょうか。それは「大利根の枯芦原に来て哭けり」の前動作なのです。誓子先生の「枯芦原青年の来るところならず」(S.25)「茫々と悲しき視界枯葦原」(S37)があるからです。しかし私は云いたい。もうそういう境地は克服して新しい心境に入っています。型に入る。そして型を出す。誰が？私です。

## 白鳥の命の首の自在なる

みち

白鳥のその長首をよくよく見ているとなんと自在な動きでもって自在に使うのがよくわかります。進む時は真っ直ぐ立てる、寝る時は首を背中に乗せる、けんかするときは振り回す、真に命の首の感じがします。私には大蛇に見えたりして怖くなる一瞬もありました。

夫逝きてさみしさこみあげてくる師走かな

多美子

この秋の十月一日に多美子さんのご主人の昭三様が亡くなられました。その同じ月に平野ひろし先生が逝去されました。師走に入りまして多美子さんの心情を赤裸々にこの句でもって吐露されたのです。多美子さんとは平成の故嘉久先生の句会からの付き合いしており、ご主人の昭三様は昭和三年生れを名前にお持ちの方でした。高級車を乗り回して多美子さんとの旅吟をお助けになるいわゆるおしどり夫婦であられました。

一句鑑賞

磯目健一

枯葦原何ぞ明るき分け入れば

高志

深い葦原の中へ身を投じてみると、未枯れた葦は茎々に冬の陽光をいっぱい浴びて照り映え、周囲は意外や明るい世界。日光も人をも遮って青葉が鬱蒼と茂る盛夏

の葦原と違って、すがれた葦原は頭上の抜けるような青天井から降り注ぐ日光の暖かさまで快い。

考へる丈をのこして葦枯れぬ

幸一

人間を考える葦に譬えたパスカルの「パンセ」は有名だが、それを想起させるに十分な身の丈を残して枯れているような葦を見て擬人的な親近感を覚えるのである。囑目の対象とそれに触発された思念の交錯を「考へる丈」と表現し、ユーモアとエスプリを醸している。

枯芦や鷺鋭き沼に風わたる

陽一

枯葦原の先に広がる沼を今しも一羽の鷺が鋭い声を発して飛び、それを追うかのように一陣の風が吹き渡る。沼の静寂を破る一瞬の風景である。

陸の白鳥家鴨と同じ歩きして

みち

水辺から上がってきた白鳥が武骨な短足でよたよたと腰を揺らがせて歩く様は家鴨そっくりで、水上の優雅なことは偉い相違である。だがそんなことは意を介さずに歩き廻る白鳥に微笑を催すほかない。「陸に上がった河童」や「馬脚を現す」の常套句が示すように、佳人は深窓にあるべきであり、至当な立ち位置から外れるとイメージダウンになりかねないのが世の常というもの。

## 嘴上げる白鳥の空白鳥座

幸一

宵の空へ長い首をもたげた白鳥の嘴が指し示すのは、銀河の一角に燦めく北の十字星白鳥座だった。広大な天ノ川に青白く光る星座を背景に白鳥が黒いシルエツトとなつて浮かんでくるスケールの大きい句である。

## 白鳥の里親となり嫁がざる

宏之助

白鳥飛来の地をめざして餌付けと環境保護に努力した本埜村の人々。その裏話にはこの句のような献身的な女性の存在もあるようだ。それは結婚より個人的な欲求・価値観を優先する今日の女性の生き方にも通底し、いろいろと考えさせられる。

## 学校も墓も田の中白鳥来

みち

一望千里苧田が広がる季節になると神々が来訪するように白鳥がやつて来る。白鳥の飛来地も学校も墓地も同じ田野の中にある。先祖から代々人生の出発と終着が営まれてきた地を寿ぐような白鳥が目に見えぬ。

## 一句鑑賞

増田陽一

翼折れし白鳥もあり雨しきる

昭七

優美高貴な白鳥の句はやや出尽くしている。白鳥には傷ついた状況もあるのだ。降り止まぬ雨がその落魄感を

強める。「白鳥もあり」か「も居て」か、と話題になった

けれど、「も居て」になると眼前の景のようになる。「もあり」の措辞で、美しい白鳥と悲劇の取り合わせで

出来る詩がある。バレエの白鳥は「死」でも「湖」でもみなそうである。同じ作者に白鳥の唄聞かばやと畔に立つの作もあり、「白鳥の歌」は死に瀕した声とされている

ので、翼折れた白鳥の句の続きかとも思ったけれど、「唄」の字であるのでそれはどうか。優美な姿に相応した囀りがあれば、というロマンチックな願望と見るのも面白い。

白鳥の着水婆娑羅尻奢る

孝三

白鳥の句で、恐らく類句は絶無であろう。婆娑羅は太平記などに出てくる南北朝の一風俗で、広辞苑によると、先ず「派手に見栄を張ること」との解があり、着水の白鳥を劇的に言いとめているが、更に「しどけないこと、乱れること、狼藉」の意ともあつて、これは下五の「尻奢る」と、奇想華麗な表現に一致する。また婆娑羅は「バシヤラ」とも響き着水時の水を撥ねる擬声音そのものである。時に独自の擬声音を發明してくれる作者ではあるけれど、古典の文字とも一致して見事、「尻奢る」にも唾然とするほかはない。

## 雪女と逢ひしこと秘し寿

幸一

「寿」は「いのちなが」と読み、俳句独自の用例か。普通、雪女に遭遇した人はことを他言すると魔性のたたりで命を奪われるのである。この作者(?)は賢明にもこれを秘密にし通したお蔭で長生きできたと言う。さぞ話したかったことであろうのに、と言う可笑しさもあるし、この作句技巧に敬服もする。

## 枯葦原何ぞ明るき分け入れば

高志

枯葦の中がとても明るかった、とは、踏み入ってみると判らない体験だなあ、と思う。枯れた葦が冬麗の日光を反射しあうのか思いがけない明るさに包まれた。その発見に感動している作者が居て、「何ぞ明るき」にその感動が活写されている。

## 白鳥の命の首の自在なる

みち

白鳥はその長い頸を自在に曲げたり伸ばしたりする。群れの白鳥がよくお互いに絡まないものだなあ、と感心するけれど、そこは命で大切なのである。白鳥のバレリーナはこの首を腕の表情で表現する。「命の首」の表現が素晴しいと思う。

## 俳窓評論纂

\*大澤真幸著の「三島由紀夫ふたつの謎」が出版された。

十一章に分けてあの日に結びついた疑問に挑戦して著者の結論を導いている。初期の作品から「豊穰の海」まで全部読んで考察している。謎とは、なぜ割腹自殺する最期を選んだのか?そして、究極の小説を目指して執筆した最後の長編「豊穰の海」のラストは、なぜあのような破壊的な結末に至ったのか?このふたつの謎には何らかの繋がりがあると考えるべきなのだが、誰もそれを合理的に説明できていない。それがこの本の動機である。豊穰の海の結末は、本多が聡子に会いに行つて直接会い、彼女から清頭の存在を否認されてしまう。松枝清頭という人は知らないし、自分は清頭の相手の女性でもないというのだ!この老尼が綾倉聡子であることにはまちがはない。にもかかわらず、彼女は清頭の存在を完全に否定してしまった。あまりのことに本多は茫然自失する。清頭が存在しなければ、当然、勲もジン・ジャンもいなかったことになる。それだけではない、ひよっとしたら、この私ですらも・門跡の目ははじめてやや強く本多を見据えた。「それも心々ココロココロですさかい」長い沈黙の対座のちに、門跡は、折角お出でやしたのやし、南のお庭でも御覧に入れましようと言ひ、本多を案内する。

芝のはずれに楓を主とした庭木があり、裏山へみちびく枝折戸も見える。夏というのに紅葉している楓もあって、青葉のなかに炎を点している。庭石もあちこちにのびやかに配され、石の際に花咲いた撫子がつましい。左方の一角に車井戸が見え、又、見るからに日に熱して、腰かければ肌を灼きそうな青緑の陶の榻が、芝生の中庭に据えられている。そして裏山の頂きの青空には、夏雲がまばゆい肩を聳やかしている。これと云って奇功のない、閑雅な、明るくひらいた御庭である。数珠を揉るような蝉の音がこを領している。そのほかには何一つ音となく、寂寞を極めている。この庭には何も無い。記憶もなければ何も無いところへ、自分は来てしまったと本多は思った。庭は夏の日びざかりの日を浴びてしんとしている。：

何も無いことが、つまり虚無が強調されて、静謐のうちには終わるのだ。この後には「豊穡の海」完」と記され、摺筆日が「昭和四十五年十一月二十五日」とある。三島が自決した日である。この時の本多は第三番目の要素としての地位から引きずり下ろされていた。彼は二の水準でつまり二の中の一頂として聡子に会わなくてはならない。かつて春の雪では本多は清顕と聡子という二の恋愛

を目撃し、証言する第三者であった。しかし、天人五衰の最後の部分では彼は二の中に埋め込まれている。これが本多と聡子の再会の場面だ。この結末は容赦のない虚無である。つまり0であるならば、どうして何かが、世界が存在するのか。0からどうやって二が、そして多が発生しうるのか。究極の真実は、虚無、つまり0とは異なる何かではないか。見聞違うほどによく似ているが、0とは異なる何かではないか。それを、著者は「一の内不可能性」と呼んでいる。この著者の主張の中身も説明されている。一だけがあるという主張は、何も無い(つまり0)と言う命題とおなじことに帰着する。一だけしかなければ、一をまさに一として構成する他が存在しないからである。だから一があるとは言えない。しかし、一がないとも言えないのだ。どうしてか。われわれは確かに一を経験するのだが、そのように経験することが可能なのは一が常に、これに尽きないという向こう側をつまみ他を含蓄するからだ。だからといって、その他は一から独立の実態として存在しているわけでもない。それゆえ一があると断定することもできない。一があるわけでもなければ、一がないわけでもない。この一の内的不可能性の隠喩的表現として、海のイメージにまさるもの



はない。水平線にまでひろがる海を一として統一的な世界としてわれわれは経験する。そのように経験しうるのは、水平線のこちら側ですべてが尽きているわけではなく、向こう側に何かがある、誰かいる、と抗<sup>あらが</sup>いがいようもなく感じるからである。しかし、向こう側の何か、向こう側の誰かは決して姿を現さない。現前しない。現前したらこちら側の要素にすでに転じてしまっている。つまり、向こう側は、つまり一に対する他は不可能なものとして存在しているのである。一の不可能性は、一でもなければ、0でもない。存在でもなければ虚無でもない。この一の内的不可能性への直感<sup>ちか</sup>は、三島の作品の中に、原始的な私たちで孕まれていた。仮面の告白にも博覧会にも、真夏の死にも、さらに端的には三島の女に対する原初的な感覚だ。女との接吻の失敗が原点である。もともと、一（私）の方に、これに尽きないという内的な否定性、内的な不可能性がある。その内的不可能性を、それ自体、独立に存在する実体として措定したらどうなるのか。それこそ、一（私）からは届かない女、接吻できない女という形態をとるのではないか。他者は私と混同するほどに近接していると同時に、唇に触れても届かないほどに遠い。三島の原点、三島の出発点に一の内的不

可能性があったということである。虚無（0）から逃げたくなるのは当然だ。それは何も生まない不毛だからだ。しかし、一の内的不可能性はこれと似て非なるものだ。それは虚無とは逆に、存在の母胎、一を起点とする存在の母胎だ。だから一の内的不可能性こそ、真実の豊穡の海である。三島は、これとは違う究極の不毛の海（つまり月の海）を見たがゆえにそれに抗するべき必死の行動をとった。それがあの日の行動であったのだ。（このように著者の主張を書いて見た。一の内的不可能性と表現されている概念もわかりにくい。一に元々ありえないものがあると云えばわかりやすいか。英語では *improbability* のことではないかと思う。私は即座に数学の集合を思い出した。集合一の補集合が海の向こうのイメージではなからうか。一の集合があつてそれ以外の集合を一の補集合と呼ぶからである。豊穡の海はカラカラの海、不毛の海、すなわち何もない虚無になる。最後の月修寺の庭のように何もない。この深い虚無を受け入れられなかった。自らの文学が何もない場所<sup>ところ</sup>に。救いようもなく深い最も徹底したニヒリズム。ここから三島は逃避した。著者はこの内的不可能性が三島の原点にあつて、これはニヒリズムと似て非なるもので、一を起点とする存在の母胎<sup>ぼた</sup>だから、これこそ真実の豊穡の海である。そうであるからそこから逃げる必要がなく、あのような政治的行動<sup>こうどう</sup>をすることはなかったのではない

かと主張しているのだ。)

\*佐藤宏之助さんの処女句集流転を読んだ。昭和五十五年から平成十四年までの自選句三五〇句余りを二句一頁ごと載せられた句集である。主に誓子選の句が並んでいる。冒頭に誓子先生の選後私言を得られた三句を据えている。「猟の犬胎内潜り潜り来し」「風倒の向日葵より抱き起す」「紙漉村暗し雪雲冠さりて」の三句である。巻末の著者略歴を見ると、天狼入会後三年目の快拳である。昭和六十二年から私も天狼に投句したので宏之助さんの句に記憶がある。その前の句から共感した句をぬく。

製鉄所鉾滓の山を月照らす

泉飲む両手両膝地に突きて

大根稲架脚が刈田にめり込めり

女の雛は檜扇の紐長垂らす

大利根の土手の際まで稲穂波

寒砂丘握りたる砂指を漏る

植樹祭木曾の五木の苗木祓ふ

雲海に黒き三角影繪富士

石舞台直撃の雹跳ね返る

富士講者みんな金明水を飲む

登山馬馬返しにて客を待つ

山頂に俯伏す万尺登り来て

菊人形自刃の武者はみな少年

猪の腸を猟夫が掴み出す

法螺を吹き山伏の子が火を渡る

禅寺の屋根に南瓜が据はりをる

みちのくの鉄路に沿ひて野火走る

仏生会堂に間引の絵馬掲げ

白鳥を送る和尚は数珠振つて

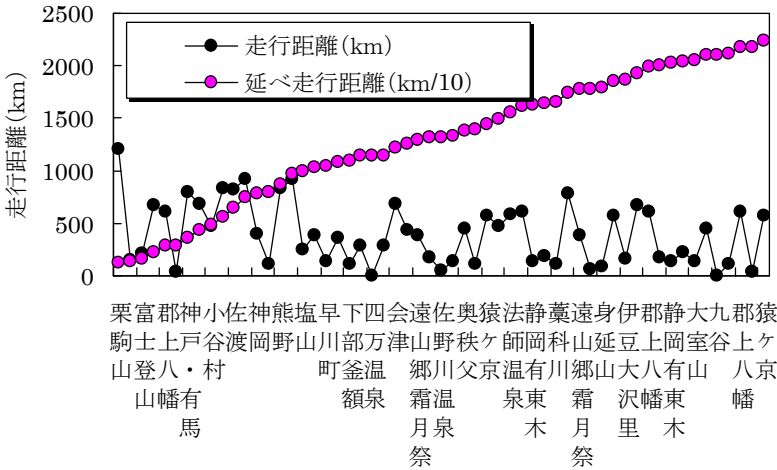
達磨市赤城風が吹き通る

宏之助さんはよく大景を詠みたいと仰っておられる。

この句集を読むとその願望がよくわかる。天狼俳句は行事俳句だと揶揄されていたようだが、人が何して何したという行事・人事俳句が多いけれども実際に取材された句が句を強くしているので今でも新鮮である。達磨市、義士祭、野馬追、菊人形、仏生会、ボロ市、御会式、鬮鶏、左義長、凧合戦、富士登山、海女、火渡、猪狩、紙漉、スキ、遍路、流鏑馬、寒造などである。句集を収める箱絵に野馬追の勇壮な絵が描かれてある。宏之助さんの師匠格のひろし先生の句もそうであるが、以前本誌にて私が今の朝日俳壇の選句に自然詠が少なくと批判的に書いたら、人間も自然の一部なんだからそれでいいで

はないかというはがきを頂いたことがあった。

平野ひろし先生の句「塩見」を主にしてー 光成高志



宏之助さんの句もそうだが、この「塩見」も遠山郷霜月祭や西浦田楽能などの取材句に見られるような行事俳句によってその土地土地の風土がしっかりと描写されている。霜月祭は国の重要無形文化財になっているが一般には知られていないでしょう。ひろし先生は俳句を通してこのような無名の文化財を顕彰されているのではないかと富士市から車でいける土地は殆ど網羅されている。しかも複数回取材されておられる。郡上八幡へは平成十三年より三回、下部釜額と霜月祭は平成十五年より毎年三回行っておられ、猿ヶ京には四回足を運ばれて居られる。誓子先生の実作者への言葉に、行きに見、帰りに見るとあるが、ひろし先生は今年見、翌年も見るを実践されているのだ。その力はどこから出るのだろうか。日本の風土を、自然を、愛して居られるからに違いありません。上の図は、年毎の吟行地を一覧し、各地への往復の走行距離をグーグルマップより求め折線グラフで示した。見やすくするために吟行地は一つ飛ばしで表した。赤点の連なりは延べ走行距離を1/10に縮尺してプロットしたもの。一番右の点を読み取れば、二万kmを越えている。九年間に走った距離は二二〇〇kmに及ぶ。芭蕉の奥の細道の距離は二四〇〇kmであるから、二二〇

〇〇割る二四〇〇は約九となり、毎年奥の細道と同じ距離を走って吟行されたということになる。これは車とは言え、現代の俳句荒行と言えるのではなか。以上は、ひろし先生の作句の背景を数値的に裏付けたもの。俳句の鑑賞は誰もがされるので、私は作句までの過程に焦点を当てて見た。蠮螋を飼われて二十二句をものにされておられますが、この修行とも思える句作は、心技体の充実された俳人のみがなされる偉業でありましょう。単に執念とか気力とかに帰するものとは思われない。蠮螋の群作には蠮螋のあはれをものあはれとして捉える具象俳句と同時にこの具象を見つめている自らを写生した抽象俳句を提示されているのです。蠮螋を見つめているひろし先生の生きる執念が感じられる。物のあはれを詠われた具象俳句は、例えば、霜月祭を挙げると、

霜月祭湯釜ぼこぼこ湯の拳

H 15

と祭りの核心を写生され、屋外では、後に示す冬の星が豪華に瞬いており、真夜中になると、神々が遠山川に禊をとる様を

丑三つを過ぐれば禊霜月祭

H 16

霜月祭ふぐり露はに禊とる

〃

と詠われている。

八百の神夜つびて遊べ霜月祭

H 17

と色々な神楽を省略されて、夜明けには

菓喰牛蒡蒟蒻猪の味

H 17

なるおじやを食べて片づけをして解散となる祭りのようだ。祭りの密度からして、沢山の句を厳選されて句集に載せられたものであろう。ここで、本居宣長の「玉勝間」（文化九年刊）の十三の巻に左のように霜月祭が紹介されているので、参考までに書き写しておく。

『信濃国の或る村々の神事にうたふ哥』

ある人いはく、しなの、国の、天龍川の河上なる、川村和田ききはなどいふ里々の神事に、湯釜に湯をわかしたぎらさせて、そのめぐりに、幣を立おきて、夜ふけて、その釜のほとりに、里人男女、老たる少き、うちまじりつどひて、その幣をとり持て、うたふ哥、おゆめすときのな、おみかげこごそく、やくもだのぼれく、』

ひろし俳句の特長などを誓子俳句との対比において見ていくと、

蝦夷春蟬こゑ湧き上り湧き上り

H 12

お頂上銀河はつきり星はつきり

〃

賽の河原舟虫のあるはあるは

H 14

雪こぼしこぼして飛驒のしぐれ雲

H 15

秋つばめ峡中高く高く群れ  
 夏休み山揺れ谷揺れ野猿揺れ  
 陶房の庭に蛇ある蛙ある  
 河原湯にみな来よ来よと初河鹿  
 鮎の川瀬に水のごゑ石のごゑ  
 石廊崎穂芒風に削ぎ削がれ  
 蝶飛び春の女神の蝶飛び  
 桃の花盛ん摘花もまた盛ん  
 時の日の病院に待つなほも待つ  
 花累々蕾累々灸花  
 六月の綿虫蒼し蒼白し  
 網を張る蜘蛛駆け上がり駆け下がり  
 一万歩黄菊白菊野紺菊  
 リフレインはリズムを良くし動作を強調する効果がある  
 るので、その動きを述べるに格好な手法である。お頂  
 上の句や秋つばめ、それに石廊崎の句は、私も体験した。  
 桃の花の句は左の誓子先生の句を想起されて生まれた  
 に違いない。  
 花盛ん築城巨石又盛ん  
 同様に、誓子句に励起されてなったと思われる句を左に  
 抜いた。

誓子 S 5 3

クリスマス星満開の牧場村  
 満開の海の岩岩船遊び  
 南瓜置く置きしところに鎮座せり  
 深谷の水の迅速山桜  
 市中にて迅速なるは雪解川  
 石叩きキリリケレレ恋をする  
 ラレレラと水田の蛙鳴き交す  
 中天に馭者座牡牛座霜月祭  
 除夜かかぐ馭者の大きな五角星  
 日短か黒三角の武甲山  
 西方に雪の富士山黒三角  
 浦々に田ありげんげん浄土あり  
 浦々の青海苔の網青畳  
 いつしかに効手ばかりに西瓜提ぐ  
 どこにこのしぶとき重さ西瓜抱く  
 鬼の子のもぞと穴居の貌出せり  
 最後の鬼の子の句は、彩 88 号の小泉博氏の左の句が佳  
 句探求に取り上げられている。  
 木を登る鬼の子蓑を携へて  
 以上のように誓子先生からひろし先生の句作りを見て  
 思うのは、いい句の本歌取り OK、真似 OK です。師も

小泉 博 H 2 1

も弟子も相互に交流すれば良いということです。詩境の認識、詩情の開拓、ああこんなことでも句になるのかという発見は自らの心を開くことになります。私は、誓子句に出会って驚き、然る後、喜びがありました。井戸浚へ浚ひし人を釣り上げる 青土手を滑り下り又上りけり 薄氷剥がして子らは透かし見る など、過去を掘り起こしてくれ、その過ぎたる時が、一瞬でもその時が如何にいとおいしいものであったかを思い知らされます。翻って今を大切にとの思いが湧いてきます。全てのものは変転し、生死を繰り返している。今の今の一瞬は生まれその一瞬無くなる。デジタル風時間の一齣一齣己が自身を刻んでいる。忘れ去られる一齣一齣もあるが、忘れ得ぬ一齣一齣もある。そのことを感じる生きています。ありのままの自分であります。恰もフィルムの一齣を巻き戻して眼前に見ている如く己を眼前にしますのであります。無論それは心の目で見えるのです。心の目で見ることが出来るのであって、それが喜びになります。生きています。証しとして喜びになるのであります。そう悟る時の生の感情があるがままにつかまえる喜び、それを可能にする文芸、そして文にして誰とでも、そういう喜びを共有できる芸としての姿、それが俳句の姿ではないでしょうか。

いい俳句を読むことを偉い先生方が勧められるのは、以上のようなことを仰っておられるのでなからうか。言うに言えざる趣、心ばへは、このことではなからうかと思ふ。ひろし俳句を読んでいて、右のようなことを考えました。その時の気持ちを大切にしようと思後のメモをそのままここに打込みました。ひろし先生は茨城県石岡生まれ、僕は不器用なのでこんな句しか作れないと言われていましたが、私はこのことがよくわかります。茨城県は、ご縁があつてあちこちと探訪しましたし、仕事でも付き合いがありましたので茨城気質なるものもおぼろげながらわかります。実直な先生であられました。誓子一辺倒と揶揄する人は居ませんのもその律儀というか実直なお人柄を皆慕つて集まつたのではないのでしょうか。もう少しお付き合いしたかったのに残念です。(終)

受贈誌(平成30年12月号 東京クラブ)

鈍色の冬空抱へ日本海 栄

底冷えの名主屋敷の大廊下 万世遊

女生徒等教科の一つ大根干す 理佳江

冬夕焼野球少年帰る頃 璃子

床下を野菜寝床に冬構 晴夫

(六つの花、六花<sup>りっか</sup>。かそれに雪割燈の季語参考になりました。)

(あすか十二月号)木犀や古刹の奥の写経会 山尾かづひろ  
山尾かづひろ吟行ノート12月(熱海伊東温泉)

時雨空初島小さく黄昏るゝ

ハルエ

小さき島小さき灯台暮早し

璃子

湯の宿の風呂吹海老の色添へて

みち

密柑山初島小さく平らなり

高志

お便り広場(到着順、敬称略)

お父さんお母さん 寒くなってきましたが、風邪などひかずお元気で過ごしてでしょうか?こちらは元気です。先日はとても立派な大根やお米をありがとうございます。子ども達の大好きなおでんにしてくださいと思います。里樹はいよいよ受験シーズンに入ってきました。色々な高校を見学に行きやつと希望校も定まってきました。それではまた。お体大切にお過ごしくださいませ。(11/28 恭子)

拝啓 俳誌を御送付いただきありがとうございます。ひろし主宰には二十年ほど御指導をうけましたが、私的なことはほとんど話したことがなく、逝去されてはじめて知ったことが多いです。俳誌の編集も主宰と奥様二人だけでやっておられましたので次号の一四四号を出版す

るためにゼロからの出発ですので苦労しています。いずれにしる一四四号は「平野ひろし先生を偲ぶ」の特集ですのでぜひ出版する予定です。出来上がりしましたらお送り致します。今後ともよろしくお願いいたします。

敬具(11/28 小泉博)

喪中につき新年のご挨拶を失礼させていただきます。

妻 松村とも子が二月十日に八十五歳で永眠いたしました。寒さに向かう折からご自愛のほどお祈りいたします。思ふこと喪中賀状で済ませけり 幸一 (11/30 幸一)

長らくご無沙汰しております。先日白金蔭屈きました。今年も秋の取り入れや畑の手入れなど忙しくしてつい月日は過ぎて行きます。そちらお変わりなく一句鑑賞など元気でいることを感じます。高志の追記読んでいて昔自分の心にも浮かんだ昔の本鳴門秘帖福山図書館ヘリクエラストしていたら入りましたとの連絡を受け毎晩読みに夢中になっております。毎月わずかな給料から月に一冊取っていたのを思い出して読んでおります。俳句の本も上下読みましたが漢字が難しいなあ。あと一ヶ月もすると又歳をとります。米寿になりました。体に気を付けて下さい。敏子さんによろしく。(11.28 健三)

(本のごことは知っていました。鳴門秘帖と親鸞は読みました。前

者は今年夏に山本耕史が法月弦之丞役でテレビドラマになりました。随分昔のことになりましたがありがとうございます。( )

白金殿第92号三〇年十一月号拝受ありがとうございます。ごさいました。今年も終わりに近づきますと十一月も何だ彼だと忙しくしている中にももう十二月になりました。目と鼻の先の神社では一日に猪(瓜坊)の大絵馬が奉納されました。市立中学美術部生徒さん達の作品で今年はシバ犬でした。早くも新しい歳の準備を身近に見ると何となく気がせいちゃいます。毎日その日にすることしたいこと事を簡条書にして済むと線を書いて行くのが全部と行かず翌日又はそれ以上残ることありで優先順位をつけてしている中残っていくのは句会の兼題の句作りです。体を使ってする事は時に老体に苛酷であつても一人生活ではしなければならず、句を作ることに、ハガキ手紙など礼状とかお見舞いお祝い喪に関するもの等多少の頭脳努力には時間もかゝることなので夜、ゆっくりなどと考えいざその時になると日中の疲れではかぐしか行かず毎晩十二時就寝が定番になってしまいました。朝は五時半起床八時を目指しているくのことを済ませゆっくり食事九時頃から雀や四十雀カラスに餌をやり庭の菊に支柱を立てたり雑草をつまんだりしていると、すぐ十二時、朝食

をしつかりとるのでおなかはず、一時半頃にお菓子やお茶でランチ代りヨタク買物に行くこと三時半頃は夜の扉を開ける気配たちまち五時は暗く猫の世話やら自分のエサ作り食べれば洗いものお風呂も入らなければ等々二十四時間を少ないと思う老人は他にもいらつしやるのでしょうか。来年早々九十六歳になるのに何て忙しい一人ぐらしかと思ひ、オリンピック迄生きていたいなんて毛頭思いません。高齢者の健診に行けばロクに診もせず採血の結果は二三年横這い心電図も胸部レントゲンもしたければするが僕は必要ないと思うとドクターから突き放され明日死んだらどうするの?と聞きたい有様百歳まで保証されたつて困ります。昔作つた拙句「去年今年変わりしものは何もなし」に又なりそうですがヨタク度は上昇することでしょう。光成様「夫妻は私の年になる迄相当な年月がおりますから笑い話ともおとり下さいませ。」平野ひろし先生追悼文」により初学の頃のことやみち様との出会いなど楽しく拝読いたしました。イタチが見られる所羨ましく存じますがみち様の轢かれたイタチや胴長が丸くなる描写は動物愛護家としては悲しくて「イタチの眼走る闇夜の沼辺かな」は歓迎です。この手紙も夜の産物につき、乱筆乱文でお許しくださいませ。次の号



白鳥・枯芦楽しみにしております。ご健康に格別のご留意を願っております。

(12.2 璃子)

(三島由紀夫の一生などと同様、人間完成すると医者も誰もつべこべ云うべき理由はないということでしょう。璃子さんの調子でお過ごしなられ自由にお書き下さるよう願っております。高志

拝啓 朝夕めつきり寒くなりましたが、如何お過ごしですか？白金葎七月発行八九号を送っていたまま失礼しています。その後、お元気ですか。私方変わりなく家内の田を畑にして作物を育てたりし、スポーツ(フテニス)に絵画(水彩画)にと忙しく暮らしています。葉野菜は虫などに食べられたりするので、根菜を主に作っています。農作物は猪や鹿などの対策が大変です。侵入を防ぐために一角を網や鉄線でおおうなどしています。昨日は第二十七回広島県シルバー作品展(県の社会福祉協議会主催)の結果が届き銀賞の通知に驚きました。作品は提出してきて来年二月頃写真をお送りする予定です。これからの寒さ厳しい時節にご自愛ください。敬具(12.3昇) 御母様お誕生日おめでとうございます。七十六歳数えで喜寿 ラッキーセブンダブルですね。お元気でお過ごしてください。

(12.6 晶子)

お母さん 76歳の誕生日おめでとうございます。教え歳

だと喜寿ということですからおめでとうでございます。お父さんお母さん共に高齢なので日々無理しないで健康には十分気を配り楽しく過ごして下さい。我孫子に住んで三十九年位ですか？僕も中学卒業して三〇年で先月同窓会をやつて改めて我孫子はいい所だと思えました。利根川と手賀沼に挟まれた自然いっぱい和田倉町で今勤めている大利根町(現加須市)と似ています。田園と利根川の風景は上流でも一緒ですね。そこで会社のボラントイアで「森づくりクラブ」という団体に草刈、枝切など年六回位活動しています。社長や県職員など年配の方達と活動しています。社長のお父さんの会長が毎年「活動記録」を作っているのですそれを同封しましたので良かったら読んで見て下さい。それでは正月に菜那と二人で(恭子さんパート、里樹は受験)行ければと思いますのでまたその時宜しくお願いします。

(12.7 拓也)

(いい活動をしていますね。続ければ何か見えて来るものがある筈です。来年渡良瀬遊水池の葦焼きを見に行こうと思っています。) やつと寒い冬になった気がいたします。年末お正月とご多忙と存じますが書きものから離れリラクソスの日もお持ち下さいね。来る年も事多そうな予感がありますので、私自身年女 96才になりますのでどうなりますやらと思

っております。私共の東京クラブも十二月八日に納めの句会をいたしました。「リメンバー・パールハーバー」の話全く出ませんでした。皆様には遠い昔のお話と思います。兼題は「冬」でした。小さな会の粗末な手書き会報を月々俳誌としてご高覧ありがとうございます。御喪中お寂しいこと、存じ上げますがご慈愛下さいますようお願いしております。ごきげんよう。

(1210 璃子)

前略師走に入り何かと忙しい季節です。お変わりありませんか？前から思っていたことが中々実行できません。今年のお米少しですが送ります。食べてみて下さい。米寿になり今年限りで農業(稲作り)止めようと思っています。体調が悪いわけではありません。残された人生少しゆつくりする積りです。亥年良い年になりますように。

草々 高志、敏子様

(1210 健二)

(長い間ほんとに「吾勞様」でした。一度だけ中学生の時稲刈りに手伝いに行ったことがあります。今も覚えています。高志)

お元氣ですか。少しばかりですが食べて下さい。私も入院していたので送れませんでした。今年はずけるくらいまでになったので送ります。朝晩寒い日が続きますので体に気をつけて下さい。

(1216 澄子)

あに・あねの新米・慈姑ありがとうございます(高志)

Merry Christmas !! お変わりありませんか。今朝今冬はじめての薄氷が庭の小鳥用のバケツに貼りました。猫はストブとこたつにばかり入っています。私のみ働き蜂です。一年中何かとお心にかけて下さいまして幸せ者です。ありがとうございます。

(1220 璃子)

今年も少なくなりました。今日は四ヶ月ぶりの泌尿器科診察に行きます。本日のこもった贈りもの届きました。お便りも同時につきました。早速味噌汁作って頂きました。味噌汁に白いごはんへおかつ味噌つけて食べる食が進みます。ありがとうございます。味噌汁の具は畑へ出ればいっぱいあります。大根白菜葱ほうれん草春菊等々娘が喜んで持って帰る。正月には敏子さんの言われる通り孫が子供連れで皆くる。墓参りは家の上なのですぐだ。ひ孫が九人いるやがて一〇人になるであろう。来年は大きいのは中学へ入るのがいます。おおじいじいの家へくるのは楽しみがあるのだ。まあ惜しまずにやればいいのだ。これでいいのだ天才バカボンハハハ・・・体調もそう悪くない。朝晩一時間のウォーキングやっています。来年は賀状は失礼します。拓也君が喪中はがきをくれました。最近は自分の同級生もほとんどいなくなりました。皆が普通で自分が長生きしすぎたのかなーと

感じますができればまだ先に延ばしたいね。晶子さんからもお便りもらいました。健康に留意されてゆつくりと暮らして下さい。  
(12<sup>19</sup> 健三)

墓掃除一人暮らして十五年(健三)

先日の句会は賑やかで良かったですね。いろいろお世話になりました。小生老耄のため無為のまま週単位で時間が過ぎて行く状況で、芭蕉の「何にこの師走の市に行く鳥」に感銘しております。今年も残り少なくなりました。どうか良いお年をお迎え下さるよう。  
(12<sup>25</sup> 陽二)

我孫子日記

	11/17	癌検診
*	11/19	北総病院
	11/20	SOA
	11/23	修験者の講演
*2	12/1	日立研修所公開
*3	12/3	白鳥田
*4	12/7	手賀川
*5	12/8	高橋源一郎
	12/19	白鳥・枯芦原
*6	12/21	例会

\* 蜘蛛の囿の裏に廻れば腹が見ゆ

\* 法螺貝を聴けり勤勞感謝の日 (みち)

\* 冬青空ヒマラヤ杉の鋒立ちに

\* 凧立つや沼の輝き小六月

\* 日の差せる紅葉は紅を深くして

\* 木の下の毬に纏はる落葉かな

\* 熊笹の緑の上の散紅葉

(みち)  
(11)

\* 色変えぬ松の丘より沼景色 (11)

\* 小白鳥頸を振り振り鳴く威嚇

\* 白鳥田鳴く羽搏く立つ水駈ける

\* 瘤白鳥見て白鳥の田に来たる

\* 瘤白鳥桃色嘴を上下動

\* 片脚を背に挙げ泳ぐ瘤白鳥

\* みちさんの前で白鳥羽を搏つ

\* 瘤白鳥鷓百合鷗連れてゐて

\* 枯芦原枯れの極みにありにけり

\* 石投げて枯芦原に紙の音

\* 丈高き枯葦伐つて寝かせたり

\* 白鳥の全長を見る橋の上

十周年記念兼題句撰集(1)

お水取り

\* お松明スマホの明り点々と (高志)

内陣の洩れ灯女人の修二会の座 (みち)

聲明にサンゲサンゲとある修二会 (高志)

\* お水取の実見の一つが何と、「スマホの明り」であるとは。僕にもこの『お水取り』の見物は一つの憧れだけれど、現実はこれであると充分想像できる現今の風俗である。『スマホ』などという粗野

な語が俳句に馴染むかどうか躊躇する前に、見てしまったものは仕方が無い、と作者はその体験を生かしたのである。こんな『修二云』の句は今までになかった。

鳥曇

鳥曇大仏様は修理中

\*目鼻なき島の地蔵や鳥曇

\*僻地に立つ石地蔵、流人の頃まで知っている古い地蔵が海からの風雨で摩滅している。それでも長い間空を見てきたので自然の動きを知悉していて、鳥の渡りを見守っている風情であろう。『島』と

鷓鴣

夕風の殊に荒れをり鷓鴣の声

夕波の川面一羽のはぐれ鷓鴣

柚の花

柚の花ひそかに参る疣地蔵

柚の花風呂の焚き口ほど近く

\*柚の花や昔庄屋の長屋門

純白の柚の花咲く田圃道

\*庄屋は江戸時代の町人の頭ともいうべき役柄だが両脇に長屋を抱えた堂々とした屋敷を構えていた。「昔庄屋の」とわざわざ「昔」の一語をいいそえた技が句に一層の風格と重々しさを生んだ。長屋

敦子

みち

みち

高志

〃

みち

多美子

昭七

門の脇の柚子の樹もそれに劣らず年月を経た大樹であろう。ゆつたりと落着き払ったリズムも時間の流れをとらえて心地よい。

健一さん抜き兼題句より抽出

下り築流れて一つ瀬となれり

下り築外道の亀のころげ落つ

芭蕉忌や風雅といふもありのまま

芭蕉忌やたそがれてなほ道とほし

真筆のほとほと読めず翁の忌

鮎出て大石の上になすと乗りぬ

畦に見し鮎ぞ鶏屋に隠れしは

右城暮石

坂本童声子

小杉余子

大庭庭樹

田中千鶴子

高幣和

馬原島彦

編集後記

本誌は二〇二一年に十周年記念号の予定です。そこで来年二〇一九年からその準備を始めます。上の兼題句撰集がその始めです。気忙しい暮れに来年再来年の事を言つて鬼に笑われそうですが、高齢者の短気と思し召してちよいと気に留めておいてくださいませ。とまれ良いお年をお迎えになられん事を祈念致します。

白金霞十二月号（通巻第九三三号）平成三十年十二月二十五日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一一一九 我孫子市南新木二二四・二七

表紙の題字・加納綾女 同写真真平成三〇年二月二十四日の白金霞